

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	第一次世界大戦期アメリカにおける海外戦場墓地巡礼についての歴史社会学的研究				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	望戸 愛果
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	望戸 愛果

講演題目	第一次世界大戦後アメリカにおける海外戦場墓地巡礼
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>1. 目的</p> <p>本研究ではアメリカにおける第一次世界大戦女性遺族の海外戦場墓地巡礼に焦点を合わせる。総額530万ドル超の巨額公費を投じ、総数約6000人の戦死者の母と未亡人を渡欧させた金星章巡礼 (Gold Star Pilgrimage, 1930年～33年) の実態を新たに明らかにすることが目的である。</p> <p>2. 成果</p> <p>「金星章巡礼」の実施過程については、G・カート・ピーラーの研究が詳しい。ピーラーは「息子を国家のために犠牲にしたことで称賛を浴びていた」女性遺族が、戦時中に自宅に金星章を飾り付けたことから「金星章の母」という名誉の称号で呼ばれるようになっていく過程を論じる。1929年3月には女性遺族を「国家のゲストとして旅行させる」法案が「金星章巡礼」の名の下に成立した。「母と息子のあいだに存在する、切り離すことのできない絆」が議会で政治的に強調されていった結果、戦死者の母親と、母子の絆には劣るものの「夫との関係」をいまだ保持しているとされた未再婚の戦争未亡人のみが事業対象者とされた過程が論じられてきた。ただし、先行研究のなかで主に論じられているのは、連邦政府が主催し、陸軍省が実施する「神聖なる」巡礼事業の枠組みの中で、あくまで協調的に行動する女性遺族像である。アメリカには、陸軍省が巡礼参加後に「不満」を発した女性遺族に関する調査を密かに行っていた事実に触れた希少な先行研究も存在するが、女性遺族の「愛国的母性」のあり方に注目するこうした議論のなかでは、この事実はあくまでも例外的な逸話として取り扱われており、参照される史料も極めて断片的である。従来所与とされてきた女性遺族の協調的行動に再考を迫り、「戦争の記憶」研究に新たな視点を提供したことが本研究の成果である。</p> <p>3. 今後の展望</p> <p>論文投稿、学会報告、本研究に関連する学術書についての書評執筆を通じて、本研究の成果をさらに発信していきたい。</p>